広報 なりた "明日の輝き"成田から

成田歴史玉手箱

●34回●

歴史と伝統文化のまち・成田。市内には、歴史ある文化財が多数あります。

昭和30年ころの成田山門前。中央に成田赤十字病院、奥は若松旅館、手前は佐野屋（川辺春光氏所蔵）

蓬莱閣ホテル

成田で最初のホテル、その後成田赤十字病院に

昭和13年成田山一千年祭でにぎわう蓬莱閣ホテル（『ふるさとの思い出写真集（明治・大正・昭和）成田』より）

今から78年前の大正15年3月、現在第一信徒会館が建つ成田山門前に、成田で最初のホテルが建設されました。門前の阿波屋・海老屋・小川屋の三つの旅館を合わせ設立した（株）蓬莱閣（ほうらいかく）ホテルです。社長は東京の実業家玉屋時次郎、役員には石川甚兵衛（海老屋）、三橋金太郎（旧成田町長）などが名を連ねていました。客室30数室、千人風呂や家族風呂、宿泊客だけでなく参詣（さんけい）客も利用できる大食堂、舞台付きの大広間などを備えた近代的なホテルでした。

当時、成田では新たに東京成芝電気鉄道（東京―成田―芝山―松尾間）の建設計画がもち上がっており、その進出拠点として建てられたホテルといわれています。しかし、鉄道敷設は会社の内紛と不況や戦争などで実現せず幻の鉄道となりました。

ホテルの様子を知る数少ない生き証人久保田きくいさん（並木町）は、「ソーダ水を飲むのが楽しみでよく食堂に行きました。コックさんがとても珍しかったのを覚えています。また、ホテルの右側に広い階段、中央にフロント、左側に大きな食堂がありました。客室は畳で、3階には大広間、大浴場は白いタイル張りでした」と話しています。

やがて太平洋戦争が起こると、ホテルや門前の旅館は陸・海軍の病院（分院）として姿を変え、各地から多くの傷病兵が運ばれました。終戦後、病院は解散しましたが、蓬莱閣ホテルだけは海軍霞ヶ浦病院の分院として使用されました。昭和20年12月には日本医療団成田地方病院が設立され、翌1月から正式に開設。物資が乏しい終戦後の地域医療に大きな役割を果たし、同23年には成田赤十字病院へと姿を変えたのでした。

その後、成田赤十字病院は現在の飯田町に移転、跡地は成田山が信徒の休憩場とするため改築工事をして、昭和34年に第一信徒会館として生まれ変わりました。今でもその外観は往時のホテルや病院の面影を残しています。

昭和5年前後の成田山門前の絵葉書。右手前から蓬莱閣ホテル、佐野屋旅館、魚田丸旅館、左手前から不二食堂、日暮本店、浅井小間物店（白土貞夫氏所蔵）

編集後記

なんともいやな世の中になってしまいました。最近、テレビのニュースや新聞記事に見られるように、登下校時などに不審者や変質者による子どもへの犯罪が急激に増加しており、市内でも被害報告が。このため本号の暮らしのお知らせでも紹介しましたが、本市では小学生全員と中学生の女子に携帯用の防犯ブザーを貸与することに。本当は持たないで済むのが一番なんですが…。ピィピィピィという防犯ブザーの音にはくれぐれも敏感に反応を。

広報なりたは再生紙（古紙配合率70%・白色度85%）を使用しています。